

## 論文審査の要旨

報告番号	総研第 566 号	学位申請者	藤田 俊浩
審査委員	主査	家入 里志	学位
	副査	堀内 正久	副査
	副査	上野 真一	副査
			博士 (医学)
			大脇 哲洋
			東 美智代

Factors Associated with the Technical Success of Bilateral Endoscopic Metallic Stenting with Partial Stent-In-Stent Placement in Patients with Malignant Hilar Biliary Obstruction

(肝門部悪性胆道閉塞に対する金属ステントの両葉留置成功に関する因子の検討)

非切除肝門部悪性胆道閉塞に対し、金属ステント(metallic stent: MS)を用いた胆道ドレナージが有用とされている。両葉ドレナージは、片葉ドレナージよりもステント開存期間、生存期間が有意に長いとの報告があり、本邦でも両葉ドレナージを施行されることが多い。しかし、両葉ドレナージは技術的難度が高く、合併症も一定数認められる。

そこで学位申請者らは、2010年4月1日から2016年2月25日の期間に、非切除肝門部悪性胆道閉塞に対しMS両葉留置を試みた54例のうち、以前より胆道にMSが留置されている症例、MSをside by side法で留置した症例、術後胃の症例を除外した47症例を後方視的に検討した。両葉ステント留置はPartial stent-in-stent法を行った。まず、両葉ドレナージ群36例、片葉ドレナージ群11例において、ステント両葉留置成功率、減黄効果、合併症発生率を評価し、多重ロジスティック回帰分析を用いて両葉留置成功に関わる因子を抽出した。次に、両葉留置に用いたMSをデリバリーシステム6.0Fr未満の群と6.0Fr以上の群の2群に分け、Propensity score matching法を用いて、処置時間、減黄効果、合併症、ステント開存期間、生存期間を比較した。

その結果、以下の知見が明らかにされた。

1. 肝門部悪性胆道閉塞に対する両葉留置の成功率は77%であった。両葉留置失敗例の内訳は、ガイドワイヤー閉塞突破不能が19%、2本目のMS留置不能が4%であった。
2. 減黄効果良好であったのは91%、合併症は26%であった。うち、ERCP後膵炎は11%、胆管炎は13%、胆嚢炎は2%であった。
3. デリバリーシステム6.0Fr未満のMS使用は、両葉留置を成功させる因子であった。
4. 両葉ドレナージ症例のうち、デリバリーシステム6.0Fr未満のMSを用いた症例では、デリバリーシステム6.0Fr以上のMSを用いた症例と比較し、ERCP施行時間、MS留置時間が有意に短かった( $P < 0.01$ )。拡張術の有無、減黄効果、合併症発生率、ステント開存期間、生存期間は2群間で差を認めなかった。
5. Partial stent-in-stent法を施行した症例全体で23.5%の合併症を認めた。うち、ERCP後膵炎は8.8%、胆管炎は11.8%、胆嚢炎は2.9%であった。

デリバリーシステム6.0Fr未満の細径デリバリーステントは、1本目のMSのメッシュ間隙、悪性胆道閉塞の突破が容易である。よって、非切除肝門部悪性胆道閉塞に対する両葉ドレナージ術は、デリバリーシステム6.0Fr未満のMSで成功率が高く、手技の時間短縮にも有用であると考えられた。

本研究は、肝門部悪性胆道閉塞に対するMSを用いた両葉ドレナージ術において、細径デリバリーシステムのMSがステント留置手技として有用であることを示した点で、非常に興味深い。

よって本研究は学位論文として十分な価値を有するものと判定した。